

星槎大学機関リポジトリ

論文種別	研究論文
タイトル	小児看護教員から学生への絵本の読み聞かせの教育効果
Title	Educational Effect of Reading Illustrated Books to Nursing Students by Pediatric Nursing Instructor
著者	白井 薫 児玉 ゆう子 佐藤 智彦
Author(s)	SHIRAI, Kaoru KODAMA, Yuko SATO, Tomohiko
誌名	星槎大学大学院紀要
Citation	<i>Seisa University Research Studies in Education</i>
巻	Vol.2
号	No.1
ページ	pp.37-57
発行日	Dec-14-2020
URL	http://id.nii.ac.jp/1486/00000193/



研究論文

小児看護教員から学生への絵本の読み聞かせの教育効果

白井 薫^{1,a}・児玉 ゆう子^{2,b}・佐藤 智彦^{2,3,c}

(¹星槎大学・²星槎大学大学院教育学研究科・³東京慈恵会医科大学附属病院)

要旨

〈背景〉X 専門学校（3 年制）の小児看護学概論では、学生の子ども理解を促すために、2012 年から「子どもは小さな大人ではない」をキーワードに「教員による絵本の読み聞かせ」を行ってきた。〈目的〉「教員による絵本の読み聞かせ」が看護学生の子ども理解に及ぼす教育効果を検証した。〈方法〉全学年対象（120 名）の無記名式アンケートを量的・質的に分析した（n=94、回収率 78.3%）。〈結果〉9 割以上が絵本に肯定的で、93 名が大人との「絵本のとらえ方の違い」を理解していた。学生は、子どもの【未熟さ】【経験の少なさ】【独自性】【尊厳】【大人らしさ】そして【子どもへの敬意】を重要視して「子どもは小さな大人ではない」ことをイメージしていた。臨地実習後の3年生は、特に【未熟さ】【独自性】を重要視していた。〈結論〉小児看護学概論での「教員による絵本の読み聞かせ」は、学生の子ども理解を促すための支えとなる有効な教授手段であることが示唆された。

キーワード：看護基礎教育、小児看護学概論、子ども理解、絵本の読み聞かせ
学生による授業評価

1. 序論

1) 社会的背景

1990 年代以降の社会構造の大きな変化に伴い、核家族化、都市化、少子高齢化が急激に進み（野村ら（2007））、それを遠因として、看護学生が地域・家庭などの日常生活の中で子どもと関わる機会が減少していることが指摘されている（石原ら（2003））。そのため、子どもの理解が困難で、臨地実習でも子どもとどう関わればよいのか戸惑う学生も少なくないと言われている（野村ら（2007））。看護学生が子どもと関わることに躊躇する要因と

2020 年 10 月 14 日受理。 著者連絡先：佐藤智彦， tomosatou-tky@umin.net

^a 星槎大学・客員研究員

^b 星槎大学大学院教育学研究科・教授

^c 東京慈恵会医科大学附属病院・准教授，星槎大学大学院教育学研究科・特任教授

して、【親の存在による心理的負担】、【苦手と感じたこどもの姿】、【否定されたと感じるこどもの反応】、【不安の先取り】、【萎縮してしまう状況】などが示されている(小代ら(2010))。その一方で、子どもへの関心や子どもの世話への関心が高い学生ほど、子どもに対して肯定的なイメージを持っていることも明らかにされている(末永ら(2012))。つまり、子どもとの関わりが少ない看護学生に対しては、小児看護学の中で、子どもへの関心や子どもの世話への関心を育むことが求められている状況にある(末永ら(2012))。

2) 学術的背景

(1) 小児看護学で学生が「子どもは小さな大人ではない」という概念を学ぶ意義

小児看護学概論は、子どもの成長・発達などを学び、小児看護の対象である子どもの理解を深めることをその到達目標とする基礎科目である。X看護専門学校(3年制、以下X校)の「小児看護学概論」(第一著者が2009年から担当)におけるキーワードは、「子どもは小さな大人ではない: Children are not small adults」ことである。これは、哲学者ルソーが18世紀に教育論『エミール』の中で述べた言葉である(Rousseau(1962, 1963, 1964))。それまで子どもは精神的・肉体的に大人と同じで、ただ体が小さいだけの存在であると考えられていたのに対して、子どもは小さな大人ではなく、子どもには子ども時代という固有の世界があり、子どもの成長過程に合わせた教育をすべきだとルソーは主張したと言われている(山口(2018))。子どもの自然性の発現を尊重する、この「子どもは小さな大人ではない」という概念は、現代の幼児教育・保育の基礎となっているが、内科とは異なる、子どもを守るための固有の世界としての小児医療の重要性を示す根拠としても広く用いられている(World Health Organization(2008); Larcher(2017))。また国内では、小児看護の臨床現場で子どもの成長・発達の特徴とも言える「子どもは小さな大人ではない」ことを踏まえた看護展開が重要であると指摘されている(奈良間(2015))。ここまでを見ると、看護基礎教育(小児看護学)において学生が「子どもは小さな大人ではない」という概念を学ぶことは、成人とは異なる、子ども特有の認知面や機能面での発達をとらえていくための基礎を学ぶことに相当すると言える。

(2) 保育者養成における「絵本の読み聞かせ」

絵本は、子どもたちのイメージや夢を広げるとともに、身につけてほしい大切な物を子どもの心の中に育んでくれるものである。そして、子どもに対して絵本を音読して聞かせる行為である「絵本の読み聞かせ」は、絵本を仲立ちにして、読み手の保育者と読んでもらう子どもの心の通い合いに相当するコミュニケーションを大切にする、保育者と子どもの心の架け橋に相当するもの(曾和(2017))と言われる。子どもに「本を読み聞かせる」という言い方は以前から使われてきていたが、現在用いられている「読み聞かせ」という言葉の成り立ちに関する確定的な情報はない(張江ら(2013))。ただし、1970年前後の子

どもの読書の推進運動の一環として、新しい児童文学を広めるとともに本を読んで聞かせる活動が広まる中で、「読み聞かせ」という造語ができたとする説もある(櫻井(2005))。

「絵本の読み聞かせ」は、読み手との温かい関わりによって、子どもは心が安定し、物語の世界に浸ることができ、現実の世界を離れ、喜んだり悲しんだり、ワクワクしたりと様々な感情を抱き、読み終えた後、満足感や充実感を味わうことができるものでもある(山田(2017))。保育の現場では、創作活動や音楽表現、体育遊び等、保育の主活動の導入部分や、昼食前やおやつの準備待ち、お昼寝やお帰りの前のお楽しみ、延長保育のお迎えを待つ間などに「絵本の読み聞かせ」は利用されている。そのため、保育者養成においても「絵本の読み聞かせ」の習得の重要性が指摘されている(秀(2018))。そして、保育学生が幼児役になり、絵本を読み聞かせてもらう立場となる体験をすることにより、聞く側に聞きやすく絵本を見やすくするための工夫が生まれ、学生の読み聞かせの技術が効率的に習得されるとの報告もある(西川(2002))。さらに、保育学生が「絵本の読み聞かせ」を保育の中で効果的に実践していくためには、絵本の面白さやその魅力を学生自身が味わうという「絵本の魅力を深く味わう体験」、絵本のジャンルを知る「絵本の知識」、子どもの立場に立って、見やすい見せ方を工夫するなどの「読み聞かせの技術」、子どもに共感し、絵本の世界を広げ、楽しみながら子どもと共に活動できる「子どもたちと絵本を楽しむ感性」の4点が重要であると言われている(山田(2017))。

(3) 小児看護学における「絵本の読み聞かせ」と「子ども理解」

小児看護学は、保育と同様に「子ども」を対象としており、小児看護学実習に保育所実習を取り入れている学校も少なくない。看護学生35名の保育所実習(5日間)が対象の報告(網野ら(2018))では、初日にオリエンテーションと絵本の読み聞かせロールプレイ(学生1名が読み手、学生4~6名が聞き手)を行い(事前準備)、最終日に学生による受け持ちクラス子どもたちへの「絵本の読み聞かせ」を行った。読み聞かせ後に学生が作成した「絵本の読み聞かせ記録」の質的分析から、保育所実習での「絵本の読み聞かせ」を通して、学生が子どもとの関わり方を学び、子ども理解を深められたことが示されている。この報告の大きな意義は、学生による子どもへの「絵本の読み聞かせ」という行為が学生の子どもの理解の深化に寄与することを示した点にある。その一方で、この「絵本の読み聞かせ」は、山田の示す「読み聞かせの技術」「子どもたちと絵本を楽しむ感性」を習得するにとどまっている。学生が子どもに対する「絵本の読み聞かせ」を効果的に実践するには、「絵本の魅力を味わう体験」、そして「絵本を知る」ことを実習前に習得する機会を持つことも重要なプロセスであると考えられる。また、学内の小児看護技術演習での学生同士の絵本の読み聞かせは、学生の子どもの理解に有効であり、小児看護学と「絵本の読み聞かせ」を結び付けた「技術演習」を行うことが重要であるとも報告されている(大澤(2005))。

基礎科目である小児看護学概論に関する過去の看護教育研究のテーマを概観すると、小

論文のテーマの分析（舟越ら（2004））、学生の小児に対するイメージ（黒坂（1993））、倫理事例を用いたグループ討議（難波（2016））といったものが該当する。特に、小児看護学概論の授業開始前後で学生が持つ小児のイメージを比較・分析した黒坂は、『成長・発達』を表しているものにおいては、前において『小さい』『幼い』というとらえ方をしていたが後においては『可能性がある』『幅が広い』等、少しとらえ方の広がりが出てきている。しかし、小児看護の特徴的な成長・発達ということには、まだまだ目を向けていないことも考えられる」と考察している。その一方で、小児看護学概論での「絵本の読み聞かせ」に関する国内からの報告はこれまでにない。

「教員による絵本の読み聞かせ」が子ども理解につながる可能性に言及した報告としては、長期間かつ継続的に絵本の読み聞かせを教員が行うことで不登校などの問題を抱える中学生が幼少時と現在の絵本の理解の仕方を比較するようになったとするもの（森（2018））、教育学部生に対する外部講師による絵本の読み聞かせが【心を惹きつける絵本の読み聞かせ体験】になったとするもの（金（2019））がある。しかし、こうした「教員による絵本の読み聞かせ」が看護学生の子ども理解に与える影響を検証した報告はない。

（4）X校小児看護学概論での「教員による絵本の読み聞かせ」の実践

X校では、2012年から小児看護学概論の授業で「教員による絵本の読み聞かせ」を行っており、学生の子ども理解に関するこの実践の教育効果を実感してきた。そこで、1年次にこの読み聞かせを受けた学生が、絵本にどのようなイメージを持ち、「子どもは小さな大人ではない」という概念をどのようにとらえているかを調査することとした。

2. 研究目的

本研究では、小児看護学概論での「教員による絵本の読み聞かせ」が看護学生の子ども理解に及ぼす教育効果を検証することを目的とした。

3. 研究方法

1) 研究デザイン

量的記述的研究および質的記述的研究

2) 用語の定義

（1）子ども理解：環境との相互作用において子どもが示す行動・反応の意味と、子どもの特性を看護学的視点から解釈してとらえることを指す（西原ら（2012））。

（2）絵本の読み聞かせ：絵本を音読して聞かせる行為を指す。

3) 研究期間

2016年10月～2017年4月

4) 研究対象者

X校の2016年度1年生・2年生・3年生(各定員40名)のうち、本研究の趣旨に同意・協力が得られた者を対象とした。

5) アンケート調査の前提としての教育的アプローチの方法

X校の小児看護学概論では、学生の子ども理解を促すために、2012年から「教員による絵本の読み聞かせ」を授業に取り入れている。同校の小児看護学概論の概略とともに、この実践について説明していく。

(1) X校の小児看護学概論

① 小児看護学概論を受講する学生のレディネス

X校での小児看護学の履修科目は、概論Ⅰ・Ⅱ(1年後期)、方法論Ⅰ(2年前期)、方法論Ⅱ(2年後期)、小児科実習・幼稚園実習(3年前・後期)である。学生は、小児看護学概論の受講に先立ち、1年前期に基礎科目の人間と生活・社会の理解、専門基礎分野の人体の構造と機能、専門分野Ⅰの基礎看護学の一部を履修している。

② 小児看護学概論の位置づけ

学生は、小児看護学概論Ⅰ・Ⅱを1年生後期に、2年前期に小児看護学方法論Ⅰを、後期に小児看護学方法論Ⅱを、3年前期・後期に小児看護学実習・幼稚園実習を履修する。小児看護学概論Ⅰでは、小児看護の変遷や理念、小児の特徴、小児保健の現状など小児看護学の基礎となる理論や知識・考え方について、小児看護学概論Ⅱ(今回の研究対象科目)では、子どもの発達や成長、それに応じた日常生活の援助などを学生は学ぶ。

③ 小児看護学概論Ⅱ(1単位 30時間)の授業計画

この科目の学習目標は以下の3つである。

- a) 小児各期における小児の成長発達について理解できる。
- b) 小児の成長発達に応じた日常生活の援助の必要性と方法を理解できる。
- c) 健康問題を抱えた小児と家族について理解できる。

この科目は、各回90分、計15回の授業で構成される。表1に示したシラバスの通り、全15回のうち、第10回目の授業の後半45分間で「教員による絵本の読み聞かせ」が行われる。

表1 小児看護学概論Ⅱシラバス

回	項目	授業内容
1~8	健康増進と成長発達を促す看護	新生児乳児期の子どもの形態的・機能的・心理社会的発達、幼児期の子どもの特徴及び基本的・社会的な生活習慣への支援、学童期の身体的成長・生理的特徴・心理社会的発達、思春期の身体的成長・生理的特徴・心理社会的発達
9~11	日常生活の援助技術	授乳、離乳、子どもと物語（絵本の読み聞かせ）、遊び
12~14	健康問題を抱えた小児を取り巻く社会	出生前診断、障害のある小児が地域で暮らすことの意味、NICUの小児と家族
15	終講試験	

(2) 読み聞かせに用いる絵本『おおきな木』の特徴

ここでは、絵本『おおきな木』(Silverstein (1976))を用いる。この絵本では、いつも一緒に遊んだりお昼寝したりする仲良しの一本のリンゴの木と一人の少年が登場する。少年は成長とともに望むものが変わり、木はその望みに合わせて自分の果実や枝、幹を少年に捧げていき、少年が老人になると、切り株になった自身を捧げたという物語である。

この絵本の読み聞かせを受けた後の物語の解釈の仕方が聞き手の年代により大きく異なることがすでに示されている(表2;守屋(1994))。7~8歳の子どもは、この物語を現実世界の出来事としてとらえるため、その感想の主体は、「木はどうしてしゃべるの」など、物語を現実世界としてとらえた質問である。9~12歳の子どもは、現実と非現実の違いが分かるようになるため、「木がしゃべれるはずがない」など現実と物語との違いをその感想の中で指摘する。13~14歳の子どもは、経験不足なため作者の意図が理解できず、「なにを言いたいかわからない」などの感想を持つ。大人(16歳以上)になると、「ここに描かれていることは世間にはよくあることだ」というように、物語世界を現実世界のコピーとしてとらえた感想を持つようになる。

また、この表2(守屋(1994))に含まれていない幼児(3歳以上)は、「絵本や物語に親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう」とされている(厚生労働省(2018))。絵本の読み聞かせを受けた幼児と大人の物語受容の在り方を比較した報告(佐々木(2012))では、幼児(3~5歳児)は、「物語世界に入り込み、物語の〈当事者〉として登場人物と交渉を持ち、相手の言葉に感動をやり動かされながら物語を受容している」一方で、大人(大学生)は、「〈当事者〉として物語の中に入り込むのではなく、〈傍観者〉として、物語を外側から眺めている」ことが示されている。こうした「〈当事者〉としての幼児・〈傍観者〉としての大人」(佐々木(2012))という違いと、7歳以降の年代別の違い(表2)を合わせると、物語世界を現実とみなし、物語世界にすめるのは幼児期から7~8歳までと言える。

このように、聞き手の年代により物語の解釈に違いを生むことができる『おおきな木』は、「子どもは小さな大人ではない」という概念を説明する好事例だと考えられたため、X校での読み聞かせの題材として選ばれた。

表2 子どもと大人の物語のとらえ方の違い

物語の解釈の仕方	頻出年齢	感想の代表例
物語世界を現実とみなしている 物語世界の中にすむことができる	7～8歳	「木はどうしてしゃべるの」 「あんな木どこにあるの」
現実と非現実の世界の違いが分かる ようになる	9～12歳	「木がしゃべれるはずがない」 「あんな枝で家が作れるはずがない」
作者の意図が理解できない	13～14歳	「なにを言いたいのかわからない」 「こんな幼稚な話…僕たちはもう大人だ」
物語世界を眺めている 物語世界を現実世界のコピーとして とらえている	大人(16歳以上)	「ここに描かれていることは世間にはよくあることだ」 「これが人間というものだ」

守屋(1994)より引用

(3) 教員による絵本の読み聞かせの実践

この絵本『おおきな木』を用いた「教員による読み聞かせ」の進め方を表3に示した。まず、この授業の中で教員が「絵本の読み聞かせ」を行い、学生がそれを受けて感想を書いてもらうことを説明し、記入用紙を配布する(導入:5分)。次に、絵本『おおきな木』を書画カメラにより拡大してホワイトスクリーンに映写しながら、教員による読み聞かせを行う。読み聞かせ終了後、学生に感想を記入してもらう(展開1:10分)。その後、教員に指名された男女3人ずつから感想を発表してもらい、各学生の感想が作者の意図を理解しようとする「大人の感想」の特徴を含んでいることを教員が説明する。さらに、感想は経験と置かれた状況によって同じ人でも変化することを説明する(展開2:10分)。次に、幼児期から7～8歳、9～12歳、13～14歳、大人(16歳以上)の感想の具体例と各年代の物語の解釈の仕方の特徴(表2)を、プリントを用いて説明する。加えて、大人の感想の具体例として教員の感想や前年度の受講学生の感想なども示す(展開3:10分)。最後に、大人はその物語を外側から眺め、幼児から7～8歳までの子どもは物語世界にすめることを説明しながら授業を振り返り、学生の感想文を回収する(まとめ:10分)。

(4) 教員による絵本の読み聞かせを受けた学生の反応

この「教員による絵本の読み聞かせ」を受けた学生からは、「絵本がこんなに奥深いものだと思わなかった」、「絵本は子どもだけのものと思っていたが大人も楽しめるものだと分かった」、「子どもと大人でこんなに物語のとらえ方が違うことに驚いた」、「自分には年齢の離れた兄弟がいるが、同じテレビ番組を見ても感想が違ふのは、年齢によるとらえ方の違いだと分かった」などの感想が寄せられた。こうした感想の中心は、授業の中で学んだ「子どもは小さな大人ではない」ことの具体例を振り返ったもの、その学びを身近な物事に当てはめたものなどであり、座学を中心に展開される小児看護学概論の授業の中で、「教員による絵本の読み聞かせ」が学生に子ども理解を深めてもらうための有効な手法であることが推測された。

表3 授業での絵本の読み聞かせの進行(第10回目授業の後半45分)

流れ	時間	指導内容	指導内容の詳細
導入	5分		本日の授業の進め方を説明する。学生に感想の記入用紙を配布する。
展開1	10分	絵本『おおきな木』の読み聞かせ	『おおきな木』を書画カメラでホワイトスクリーンに拡大して、教員による絵本の読み聞かせを行う。
		感想の記入	学生に感想を記入してもらう。
		感想の発表	記入した感想を学生に発表してもらう(男女3人ずつ)。
展開2	10分	大人の感想の特徴の説明	この読み聞かせを受けた時に、大人は自分の過去の経験に照らして作者の意図を理解しようとすることを説明する。さらに、経験には個人差・経時的変化があるので、この絵本に対する各人の感想も置かれた状況や経験の積み重ねにより変化することを説明する。
		子どもと大人の物語の とらえ方の違いの説明	この絵本に対する、幼児から7~8歳、9~12歳、13~14歳、大人(16歳以上)の感想の具体例と各年代の特徴を説明したプリントを配布する。幼児から7~8歳までは、現実と非現実の境目がなく物語世界にすむことができることを説明する。9~12歳は物語が非現実であることを確認し、現実と非現実の違いの枠組みができることを説明する。13~14歳は経験不足のため、作者の意図が理解できないことを説明する。大人(16歳以上)は非現実世界を現実世界のコピーとして理解することができることを説明する。
まとめ	10分	振り返りと感想文の回収	同じ物語でも、大人はその物語を外側から眺め、幼児から7~8歳までの子どもは物語世界にすめることを説明し、大人と子どもの物語のとらえ方の違いを振り返る。最後に学生の感想文を回収する。

6) データ収集方法

(1) アンケート調査の内容

全学年を対象にした無記名式アンケートの質問項目は、①属性(性別・年齢)、②絵本のイメージ;9つのイメージ(おもしろさがある、親しみを感じる、感受性がある、ユーモアがある、魅力がある、価値がある、意味がある、好きである、必要である)を5件法(5:とてもあてはまる~1:全くあてはまらない)で問うもの、③絵本のとらえ方に年齢の違いや子どもと大人に違いがあるか(選択:ある、なし)、④「子どもは小さな大人ではない」ことに対する立場(選択:賛成、反対、どちらでもない)とその理由(自由記載)、とした。

3年生を対象にした無記名式アンケートには、上記①~④のほかに、⑤卒業後に絵本の読み聞かせは役に立つか(選択式:思う、思わない、どちらでもない)、⑥小児看護学実習で「子どもは小さな大人ではない」と感じた場面(自由記載)、を含めた。

(2) アンケート調査の実施時期

各学年への調査時期を図1に示した。1年生対象の調査は、絵本の読み聞かせを受けた小児看護学概論Ⅱの10回目授業終了後に行った(2016年11月)。2年生対象の調査は、1年次(2015年)に絵本の読み聞かせの説明を受けてから1年が経過した時点で行った(2016年11月)。3年生対象の調査は、1年次(2014年)に絵本の読み聞かせの説明を受けてから2年が経過し、かつ全臨地実習と看護師国家試験を終えた時点で行った(2017年3月)。

(3) アンケート内容の信頼性と妥当性の確保

このアンケートは、授業内容や読み聞かせの実践内容をもとに独自に作成したものである。事前に著者らで議論を重ね、調査内容の信頼性と妥当性の確保に努めた。

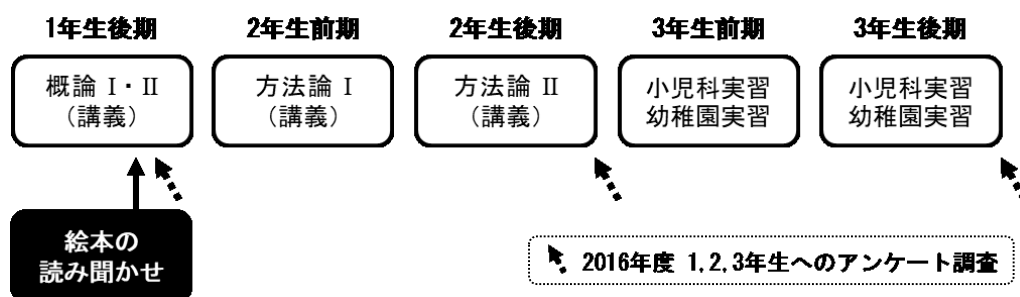


図1 小児看護学履修スケジュールとアンケート調査の実施時期

(4) アンケートの回収

1年生には第10回目の授業の「まとめ」の時間(表3)に、2年生と3年生にはX校学校長の許可を得て授業時間外に、口頭でアンケート調査の説明を行ったのちに用紙を配布した(回答時間:約30分)。回答終了後は、学生にアンケート用紙を裏返してもらい、教室内で教員が回収した。回収にあたり、各学生のアンケートへの参加・不参加が教員にも学生にもわからないように配慮した。

7) データ分析方法

(1) 量的データの分析方法

アンケート内の数的データの分析にはExcel 2016(マイクロソフト社)を用いた。絵本のイメージに関する回答結果(5件法)について、対応のないt検定により学年間の比較を行い、その有意確率は0.05とした。

(2) 質的データの分析方法

アンケート内の「子どもは小さな大人ではない」ことに対する立場に関するテキストデータ(自由記載)からは、各立場(賛成・反対・どちらでもない)を取る理由が示された部分を抜き出しコードとした。実習で「子どもは小さな大人ではない」と感じた場面に関するテキストデータ(自由記載)からは、実習で感じた「子どもの特徴」が示された部分を抜き出しコードとした。類似する意味内容のコードから、サブカテゴリーを生成し、共通する内容を含むサブカテゴリーからカテゴリーを生成した。その後、回答用紙の記述内容を再確認しながら、各カテゴリーをまとめ直す過程を繰り返し、分析の精緻化を図った。著者らで原資料に基づく議論を重ね、分析結果の信頼性と妥当性の確保に努めた。

8) 倫理的配慮

本研究は、星槎大学研究倫理審査委員会の承認(承認番号:1624)およびX看護専門学校校長の同意を得て実施した。無記名式アンケート調査への参加は自由意志で、回答に関して不利益を受けないこと、研究過程で得た情報は研究目的以外では使用しないことを

口頭で説明し同意を得た。無記名式アンケートにつき、回答用紙の提出により本研究への同意とした。また、テキストデータの分析にあたり、固有名詞は匿名化し、個人が特定できる内容は抽象化もしくは削除した。

4. 結果

1) 全学年対象のアンケート調査

1年生 38名、2年生 38名、3年生 18名、計 94名が回答した（回収率はそれぞれ 95.0%、95.0%、45.0%、78.3%）。

(1) 絵本のイメージ

絵本のイメージに関する9項目の評価は、全ての学年でいずれも平均4.0以上であった。また、各項目で4もしくは5の評価をした人数は平均86.8名(92.3%)であった。そして、2年生のイメージは1年生より全項目で高く、3年生では、「ユーモア」を除く全ての項目のイメージが1年生よりも高かった（各項目： $p < 0.05$ ）。9項目のうち、「親しみ」「魅力」「意味」「好き」「必要」の5項目で2年生の点数が3年生より高かった（各項目： $p < 0.05$ ；表4）。

(2) 子どもと大人の絵本のとらえ方の違いの認識と「子どもは小さな大人ではない」ことに対する立場

子どもと大人の絵本のとらえ方の違いについて、1年生 38名、2年生 37名、3年生 18名、計 93名（98.9%）が「あり」と答えた。

表4 学生の絵本のイメージ（平均）

絵本のイメージ	1年生 (n=38)	2年生 (n=38)	3年生 (n=18)	計 (n=94)
おもしろさ ^{a,b}	4.1	4.5	4.5	4.3
親しみ ^{a,b,c}	4.2	4.6	4.4	4.4
感受性 ^{a,b}	4.3	4.6	4.6	4.5
ユーモア ^a	4.3	4.5	4.2	4.4
魅力 ^{a,b,c}	4.4	4.7	4.5	4.5
価値 ^{a,b}	4.4	4.7	4.7	4.6
意味 ^{a,b,c}	4.4	4.8	4.4	4.6
好き ^{a,b,c}	4.4	4.6	4.5	4.5
必要 ^{a,b,c}	4.5	4.9	4.7	4.7

5段階評価（5：最も肯定的～1：最も否定的）

^a $p < 0.05$ （対応のない t 検定：1年生 対 2年生）

^b $p < 0.05$ （対応のない t 検定：1年生 対 3年生）

^c $p < 0.05$ （対応のない t 検定：2年生 対 3年生）

表5 子どもと大人の絵本のとらえ方の違いとキーワードに対する立場

質問	回答	1年生 (n=38)	2年生 (n=38)	3年生 (n=18)	計 (n=94)
子どもと大人の 絵本のとらえ方 の違い	あり	38 (100.0)	37 (97.4)	18 (100.0)	93 (98.9)
	なし	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	不明	0 (0.0)	1 (2.6)	0 (0.0)	1 (1.1)
「子どもは小さな 大人ではない」 に対する立場	賛成	33 (86.8)	20 (52.6)	11 (61.1)	64 (68.1)
	どちらでもない	5 (13.2)	15 (39.5)	5 (27.8)	25 (26.6)
	反対	0 (0.0)	2 (11.1)	2 (11.1)	4 (4.3)
	不明	0 (0.0)	1 (2.6)	0 (0.0)	1 (1.1)

単位：名（％）

「子どもは小さな大人ではない」ことに対する立場として、1年生33名（86.8％）、2年生20名（52.6％）、3年生では11名（61.1％）が「賛成」と回答した。「どちらでもない」と答えた割合は、2年生（15名、39.5％）で一番高く、次いで3年生（5名、27.8％）であった（表5）。

（3）「子どもは小さな大人ではない」ことに賛成または反対する理由

1年生31名、2年生28名、3年生15名の回答（自由記載）より（【カテゴリー】〈サブカテゴリー〉[学生の意見]として示す）、学生が「子どもは小さな大人ではない」ことに対してそれぞれの立場をとる理由は、【子どもの未熟さ】【子どもの経験の少なさ】【子どもの独自性】【子どもの尊厳】【子どもの中の大人らしさ】【子どもへの敬意】の6つのカテゴリーに分けられた（表6）。

①【子どもの未熟さ】

このカテゴリーは、〈漠然とした未熟さ〉〈認知の未熟さ〉〈社会性の未熟さ〉〈情緒の未熟さ〉の4つのサブカテゴリーから構成された。〈漠然とした未熟さ〉と〈認知の未熟さ〉は、「賛成」の1、2年生から指摘された。〈社会性の未熟さ〉は「賛成」の2、3年生から、〈情緒の未熟さ〉は「賛成」の3年生から指摘された。

②【子どもの経験の少なさ】

これは、1つのサブカテゴリー〈経験の少なさ〉から構成された。この〈経験の少なさ〉は、各学年の「賛成」の立場の者から指摘された。

③【子どもの独自性】

これは、〈子どもの純粋さ〉〈子どもの発想力〉の2つのサブカテゴリーから構成された。〈子どもの純粋さ〉は、「賛成」の1、2年生から、〈子どもの発想力〉は、「賛成」の1、2、3年生から指摘された。

表6 「子どもは小さな大人ではない」ことに賛成または反対する理由

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な意見	1年生 (n=31)			2年生 (n=28)			3年生 (n=15)		
			賛成	どちらでもない	反対	賛成	どちらでもない	反対	賛成	どちらでもない	反対
子どもの未熟さ	漠然とした未熟さ	できないことがたくさんある	5	0	0	1	0	0	0	0	0
	認知の未熟さ	物事の知識があまりない	17	0	0	7	0	0	0	0	0
	社会性の未熟さ	自立した行動をとることが難しい	0	0	0	1	0	0	3	0	0
	情緒の未熟さ	大人と感情の持ち方が違う	0	0	0	0	0	0	2	0	0
子どもの経験の少なさ	経験の少なさ	子どもはまだ経験が少ない	5	0	0	2	0	0	2	0	0
子どもの独自性	子どもの純粋さ	大人よりもピュア	2	0	0	1	0	0	0	0	0
	子どもの発想力	大人が考えつかないような考え	1	0	0	4	0	0	3	0	0
子どもの尊厳	子どもの尊厳	子ども個人の尊厳はある	0	1	0	0	4	1	0	2	1
子どもの中の大人らしさ	大人っぽさ	大人な子どももいる	0	0	0	0	3	1	0	0	0
	大人への準備	大人になるための準備段階	0	0	0	0	3	0	0	0	0
子どもへの敬意	子どもからの学び	子どもから学ぶことも多い	0	0	0	0	0	0	0	2	0

灰色：各サブカテゴリーに該当する回答をした学生数（名）

④【子どもの尊厳】

これは、1つのサブカテゴリー〈子どもの尊厳〉から構成された。このサブカテゴリーは、各学年の「反対」もしくは「どちらでもない」の立場の者から指摘された。

⑤【子どもの中の大人らしさ】

これは、〈大人っぽさ〉〈大人への準備〉の2つのサブカテゴリーで構成された。〈大人っぽさ〉と〈大人への準備〉は、「どちらでもない」立場の2年生から指摘された。

⑥【子どもへの敬意】

これは、1つのサブカテゴリー〈子どもからの学び〉で構成された。この〈子どもからの学び〉は、「どちらでもない」立場の3年生から指摘された。

2) 3年生のみ対象のアンケート調査

(1) 卒業後に絵本の読み聞かせは役に立つと思うか

17名(94.4%)が役立つと、1名(5.6%)がどちらでもないと回答した。役立たないと回答した者はいなかった。

(2) 「子どもは小さな大人ではない」と感じた場面

3年生15名からの「子どもは小さな大人ではない」と感じた小児看護学実習中の具体的な場面(自由記載)の特徴は、【子どもの未熟さ】【子どもの独自性】の2つのカテゴリーに分類された(表7)。

①【子どもの未熟さ】

これは、〈情緒の未熟さ〉〈認知の未熟さ〉〈社会性の未熟さ〉の3つのサブカテゴリーから構成された。いずれのサブカテゴリーも「賛成」または「どちらでもない」の立場の者から指摘されたが、〈社会性の未熟さ〉は「反対」の立場の者からも指摘された。

表7 小児看護学実習で「子どもは小さな大人ではない」と感じた場面 (3年生、n=15)

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な意見	立場		
			賛成	どちらでもない	反対
子どもの未熟さ	情緒の未熟さ	子どもは自分の気持ちを優先させる	1	1	0
	認知の未熟さ	知識をつけていく段階なので好奇心のまま危険なことを行う	0	1	0
	社会性の未熟さ	大人の手をかり、一緒に行ったり、覚えたりと手助けが必要	1	1	2
子どもの独自性	子どもの純粋さ	子どもは皆同じ友達という考えのもと平等に接していた	2	0	0
	子どもの自由さ	子どもは自由で何かにとらわれない	1	0	0
	子どもの素直さ	大人の言うことを信じて疑わなかった	1	2	0
	子どもの成長	実習の期間の中でも体験を通して成長していく姿がみられた	2	0	0

灰色：各サブカテゴリーに該当する回答をした学生数 (名)

②【子どもの独自性】

これは、〈子どもの純粋さ〉〈子どもの自由さ〉〈子どもの素直さ〉〈子どもの成長〉の4つのサブカテゴリーから構成された。いずれのサブカテゴリーも「賛成」の立場の者から指摘されたが、〈子どもの素直さ〉は「どちらでもない」立場の者からの指摘もあった。その一方で、「反対」の立場の者からはこれら4つのサブカテゴリーのいずれも指摘されなかった。

5. 考察

本研究では、小児看護学概論での「教員による絵本の読み聞かせ」が看護学生の子ども理解に及ぼす効果を、受講直後の1年生、それぞれ1、2年前に受講した2、3年生にアンケート調査を行うことで検証した。その結果、多くの学生が絵本に肯定的イメージを持っており、子どもと大人の「絵本のとらえ方の違い」を理解していることが明らかになった(表4)。また、学生は、子どもの【未熟さ】【経験の少なさ】【独自性】【尊厳】【大人らしさ】そして【子どもへの敬意】を重要視して「子どもは小さな大人ではない」ことをイメージしていた。中でも、臨地実習を終えた3年生は、【未熟さ】【独自性】を重要視していた(表6、7)。ここから、1年生は授業での学びを振り返りながら、2年生はその後の学内での様々な専門領域の学習・演習で積み重ねた知識や経験に基づいて再考しながら、3年生は子ども理解を深められた実習体験を加味して再考しながら、「子どもは小さな大人ではない」ことに対する立場を表明していたと考えられた(図2)。そして、「教員による絵本の読み聞かせ」が、こうした学生の子ども理解に関する思考を深めるためのきっかけになる可能性も考えられた。以下、子ども理解の観点から、小児看護学概論で「教員による絵本の読み聞かせ」を学生が体験する意義を中心に考察する。

1) 絵本のイメージとキーワード理解

全学年対象のアンケート調査では、「絵本のイメージ」9項目の評価はいずれも平均4.0以上であり、ほとんどの学生が「子どもと大人の絵本のとらえ方の違い」があることを認識していたことが明らかになった(表4)。特に、小児看護学概論の授業を終えた直後の1年生でも、1年前にこの授業を受けた2年生でも、2年前にこの授業を受け小児看護学実習を終えた3年生でも、絵本の「必要性」の評価が最も高く、今回の授業実践が「絵本を通じた子ども理解」の重要性を学生に印象づけた可能性が考えられた。

「子どもは小さな大人ではない」ことに対する立場とその理由を見ると、「賛成」した1年生では【子どもの未熟さ】を理由に挙げる者が最も多かった(表6)。1年生へのアンケート調査の実施時期が、「絵本の読み聞かせ」とともに「子どもと大人の物語のとらえ方の違い」を説明した授業の直後であったことがこの結果に影響したと考えられた。「賛成」した2年生16名のうち9名が【子どもの未熟さ】をその理由として挙げており、さらにそのうちの1名が〈社会性の未熟さ〉を指摘していた。これは1年生では見られなかったもので、2年生になると子どもの社会性に目を向ける者が出てくることが推測された。また、「どちらでもない」9名、「反対」2名は、その理由に【子どもの尊厳】【大人らしさ】を挙げていた。【大人らしさ】も1年生には見られなかった理由で、2年生が〈社会性の未熟さ〉〈大人っぽさ〉〈大人への準備〉という新たな子ども理解の視点を持ち始めていることがうかがえた。こうした2年生の反応には、授業を受けてからの1年間に様々な専門領域の学習・演習で積み重ねた知識や経験に基づいて「子どもは小さな大人ではない」という概念を再考したことが反映されていると考えられた(図2)。

「賛成」した3年生10名のうち、7名は【子どもの未熟さ】と【子どもの独自性】をその理由として挙げていた。また2名が挙げた〈情緒の未熟さ〉という理由は、1年生や2年生には見られないものであり、3年生になると子どもの情緒面に目を向ける者が出てくることがうかがえた。また、「どちらでもない」4名、「反対」1名は【子どもの個性】【子どもへの敬意】をその理由に挙げていた。特に【子どもへの敬意】は、3年生のみに見られた理由であった。これは、3年生は実習を経験することによりさらに子ども理解が深ま

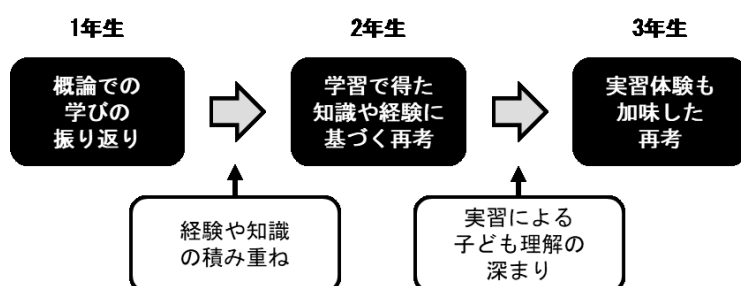


図2 「子どもは小さな大人ではない」ことへの立場の考え方

り、1、2年生では見られなかった「多角的な子ども理解」ができるようになったことが影響したと考えられた(図2)。

なお、今回の調査で学生が「子どもは小さな大人ではない」ことに反対あるいはどちらでもないという立場を見せたとしても、それは、その学生の概念理解を否定するものではなく、各学生の受け止め方の違いを反映した結果だと考えられる。「賛成」を表明した者は、1年生で最も多かった一方で、演習を経験した2年生や、実習などで子どもと接している3年生では相対的に少なかったが(表5)、2、3年生は、それぞれが積み重ねた知識や経験をもとに、「子どもは小さな大人ではない」ことが当てはまる場面も当てはまらない場面もそれぞれ想起していたことがうかがえた(表6、7)。つまり、小児看護の概略を理解する小児看護学概論で、子ども理解を深めるために重要な「子どもは小さな大人ではない」という概念を学ぶ具体例としての「教員による絵本の読み聞かせ」を受けることは、たとえ一度だけの体験だとしても、学生が「子どもは小さな大人ではない」ことを再考する上で重要な役割を果たしていることが推測された。

2) 絵本の読み聞かせの今後の活用

3年生対象のアンケート調査からは、「絵本の読み聞かせ」が卒業後も役に立つとほとんどの学生が考えていることが明らかになった。そして、3年生が実習で「子どもは小さな大人ではない」と感じた根底には、【子どもの未熟さ】【子どもの独自性】の2つの要素があることも示された(表7)。

「賛成」の立場を示した3年生は、[友達とケンカをしても次の日には仲良しになっていた]、[実習の中でもいろいろな発見をしたり、体験をして成長する姿がみられた]といった場面を、「どちらでもない」あるいは「反対」の立場を示した学生も、[子どもは常に自分の気持ちを優先させるため、周囲のことを考えずに行動する場面が見られた]、[劇をしていて素直な返事が返ってきた]といった具体的な場面をそれぞれ記載した。ここから、小児看護学概論の授業で学生に理解してもらいたい「子どもは小さな大人ではない」という概念が、小児看護学実習の体験を振り返る上でも役に立つことが示唆された。

3) 学生の子ども理解

今回の調査を通して、3学年とも総じて絵本に肯定的なイメージを持っていたことが明らかになった(表4)。ここからは、小児看護学概論で教員が絵本の読み聞かせを行うことは、学生が絵本に対して肯定的なイメージを卒業まで持ち続けることに影響する可能性が考えられた。また、授業のキーワードである「子どもは小さな大人ではない」ことに、学生が賛成または反対する理由を分析することで、学生が進級とともに、自身の積みあげた知識や経験を活用して、このキーワードを再考していることが推測された(図2)。

「子どもと大人で物語のとらえ方に違いがあるか」という問いに、ほぼ全員が「ある」と回答していた(表5)ことから、今回用いた絵本『おおきな木』は、「子どもと大人の物語のとらえ方の違い」を学生が理解する上で役立つツールであることがあらためて確認された。そして、3年生は「絵本の読み聞かせ」が卒業後も役に立つと考えていた。これら2つの結果から、今回のような「教員による絵本の読み聞かせ」は、小児看護学概論の課題とされている、小児の特徴的な成長・発達に学生が目を向けるためのアプローチ(黒坂(1993))の1つとして有用であると考えられた。

小児看護学実習における学生の子どもに対するイメージの変化を縦断的に調査した報告では、「保育園実習前、後、病棟実習前後ともにイメージに差がみられた項目は、『かわいい』『正直』『敏感』などの他に、『気分が変わりやすい』『年齢によって全く違う』『遊びが大好き』などであり、学生が子どもと接することにより、より具体的にイメージしやすくなるものと思われる」と、学生の子どものイメージが実習の前後で変化することが示されている(内田ら(1993))。また、看護学生の子どもに対するイメージの変化を小児看護学講義前と保育所実習後、病棟実習後に縦断的に調査した報告では、「小児看護学講義前に比べ、保育所実習後は否定的表現が少なくなり、子ども個人がもっている個性や成長・発達を示すイメージを持ったことは保育所実習により子どもは日々成長していく過程を知り、内田らの因子分析の結果と同じように肯定的表現が多くなった」ことが指摘されている(上山(1999))。これらの先行研究は、いずれも小児看護学実習を経て、学生の子どもイメージが具体的かつ肯定的に変化することを明らかにした点で、小児看護教育領域で重要な意義を持つものである。本研究でも、3年生は、「友達とケンカをしても次の日には仲良しになっていた」、「実習の中でもいろいろな発見をしたり、体験をして成長する姿がみられた」、「本を見て楽しそうにしている姿は知らないことへのまっすぐな素直な思いを感じた」など、実習中の具体的な場面を回想しながら、「子どもは小さな大人ではない」ことをより具体的にイメージしていた。

また、小児看護学講義での学生の子どもに対するイメージについて、「講義前は興味的表現が多いが、実習が進むにつれて活動的表現、子どもを取り巻く環境など多岐に渡って表現している。つまり学生の子どもイメージは、実習を通して広がっていく」ことが指摘されている(上山(1999))。本研究でも、3年生だけが【子どもへの敬意】を重要視していたこと(表6)は、学生の中での子どもイメージの広がりを示すものであり、この上山による指摘に合致する結果と言えた。

前出の内田と上山の研究は、「子どものイメージ」という大きな枠組みを学生に問うものであった。その一方で本研究は、「子どもは小さな大人ではない」というキーワードを学生に投げかけてその反応を分析した点で、これらの研究と一線を画すものである。本研究のように、同じスタイルの授業を受けた学生を対象とした学年横断的研究は、学生の進級に

伴う「子ども理解」の広がりを目指す点で有用な方法と考えられた。

新生児・乳児モデルを使用した小児看護学演習の授業に関する学生の感想の質的分析を行った報告では、「対象理解の導入として、小児看護演習にモデルを使用することは、子どもの早期イメージ化をはかる学習目的として有効な教授手段である」と結論付けられている(糠塚ら(2004))。本研究での教員による「絵本の読み聞かせ」は、演習として行ったものではないが、「子どもと大人の物語のとらえ方の違い」を学生が知り、「目の前にいない子どもをイメージ化できる」という点で、糠塚らの言う「モデル教材」となっていたと言える。

4) 「絵本の読み聞かせ」を小児看護学概論で行う意義

図1に示した通り、小児看護学概論は小児看護学の中で最初に学ぶ科目である。その学習目標には各期における小児の成長発達についての理解が含まれている。今回の調査を通して、この時期に、「教員による絵本の読み聞かせ」をすることは、その後の小児看護学方法論での学習や小児看護学実習につながる、子ども理解の大切な基盤を学生が作るためのサポートになりうると考えられた。

保育学生の絵本の読み聞かせ体験に関する実態調査の報告では、実習前に学生が絵本と出会うことについて、「絵本には、深い意味や味わいがあるものが多くある」、「それは知識としての理解ではなく、絵本を通じた心を揺さぶられる体験を通して感じてもらいたい。そのような体験が出来るよう、養成校の教員は学内実習の中で指導法を工夫することが重要である」と指摘されている(山田(2017))。実際に、第一著者による読み聞かせの後には、学生から「絵本がこんなに奥深いモノだとは思わなかった」、「大人になってから読み聞かせをしてもらうことで子どもの頃とは違った面白さがあった」等の感想が寄せられた。

「子ども理解」に重きを置く小児看護学概論において、担当教員が絵本の読み聞かせを行う大きな意義は、絵本を通じて心が揺さぶられる体験を学生に与えることであり、実習に向けた練習として演習の科目で「絵本の読み聞かせ」を学生に行ってもらうこととは大きく異なると言える。

5) 学生アンケートによる授業評価の意義と今後の展望

今回の結果から、「教員による絵本の読み聞かせ」が小児看護学を学ぶ学生に有用であることが示されたが、今後もこの読み聞かせを取り入れた授業実践を継続していく上で、本研究の限界も考えておく必要がある。

まずは調査時期である。特に3年生の参加が少なかったが、国家試験を終えた3年生に自宅学習日が多かったことが影響したと考えられた。3年生は実習終了直後に調査するなどの工夫も必要であると考えられた。そして、各学年の調査が1回にとどまった点である。

学生の「子ども理解」に関する学びを検証するには、受講前から卒業までの変化を同じ集団で経時的に追跡していくことが必要である。

6. 結論

小児看護学概論で、「教員による絵本の読み聞かせ」を体験した学生の多くは、絵本に肯定的イメージを持ち、子どもと大人の絵本のとらえ方の違いを理解していた。進級に伴い学生の知識や経験が増えることは、「子どもは小さな大人ではない」という同科目のキーワードを多角的に解釈していく上でも重要な要素と考えられた。教員が「絵本の読み聞かせ」を行うことは、学生の子どもの理解を促すための支えとなる有効な教授手段であることが示唆された。

謝辞

本研究に協力いただいた X 看護専門学校の学生の皆さんに謝意を表す。

引用・参考文献

- 網野裕子, 沖本克子 (2019). 「小児看護学実習 (保育所実習) における『絵本の読み聞かせ』に関する学生の学び」『岡山県立大学教育研究紀要』3 (1), 7-1-7-9.
- 舟越和代, 松村恵子, 榮玲子, 小川佳代, 三浦浩美 (2004). 「母性看護学概論と小児看護学概論における学生の学び—小論文テーマの分析—」『香川県立保健医療大学紀要』1, 129-133.
- 張江洋直, 池田裕子, 安藤友晴 (2013). 「児童サービス論の現在的な課題: 『読み聞かせ』生成史と構造分析を中心に」『稚内北星学園大学紀要』13, 7-42,
- 石原あや, 藤井真理子, 鎌田佳奈美, 大森裕子 (2003). 「看護学科学生の子どもの接触体験および認識に関する調査」『大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要』8, 65-72.
- 金娟鏡, 堀之内さち子, 黒瀬 圭子 (2019). 「大学と地域の連携による『絵本の読み聞かせ』授業: 保育実践力の基礎を育むために」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』70, 67-82.
- 厚生労働省 (2018). 『保育所保育指針解説』フレーベル館, 264-265.
- 黒坂知子 (1993). 「学生の小児に対するイメージ授業前・後の比較—」『東京医科大学看護専門学校紀要』4 (1), 28-34.
- Larcher, V. (2017). Children Are Not Small Adults: Significance of Biological and Cognitive Development in Medical Practice: Schramme, T., Edwards, S. Handbook of the philosophy of

medicine. Dordrecht: Springer, 371-93.

森慶子 (2018). 「絵本の読み聞かせの教育的効果の研究 -NIRSによる脳反応の解析と学校における実践の質的分析を中心に-」. 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科教科教育実践学専攻博士論文. <<http://repository.hyogo-u.ac.jp/dspace/bitstream/10132/17570/1/%E6%A3%AE%E6%85%B6%E5%AD%90%EF%BC%BF%E6%9C%AC%E6%96%87.pdf.pdf>> (2020年8月25日閲覧)

守屋慶子 (1994). 『子どもとファンタジー 絵本による子どもの「自己」の発見』新曜社, 5-47.

難波奈保子 (2016). 「小児看護学における倫理事例を用いたグループ討議による学生の学び」『東京医科大学看護専門学校紀要』25 (1), 35-44.

奈良間美保 (2015). 『系統看護学講座 専門分野II 小児看護学1』医学書院, 30.

西原みゆき, 山口 桂子 (2012). 「看護学生の『子ども理解』評価尺度の開発 -3年課程看護専門学校学生を対象として-」『日本看護研究学会雑誌』35 (1), 1_127-1_136.

西川宏子 (2002). 「保育学生における絵本の読み聞かせの理論及び方法の修得に関する研究-絵本を読み聞かせられる立場に立つ経験を取り入れることを通して-」『中国学園紀要』37-41.

野村幸子, 河上智香, 長谷典子, 藤原千恵子 (2007). 「子どもとの接触体験からみた看護学生の子どもイメージ」『人間と科学』7 (1), 169-180.

糠塚亜紀子, 平元泉 (2004). 「新生児・乳児モデルを使用した小児看護学演習による対象理解の導入としての効果」『秋田大学医学部保健学科紀要』12 (2), 145-151.

小代仁美, 檜木野裕美 (2010). 「小児看護学実習において看護学生が子どもと関わることを躊躇させる影響要因」『日本看護研究学会雑誌』33 (2), 69-76.

大澤早苗 (2005). 「「絵本の読み聞かせ」を小児看護技術演習に取り入れた有効性」『日本看護学会論文集 小児看護36』日本看護協会出版会, 134-136.

Rousseau, J. J. 著, 今野一雄訳 (1962, 1963, 1964). 『エミール』(上巻, 中巻, 下巻) 岩波書店.

櫻井美紀 (2005). 「日本と海外, 公教育の語りの授業」『口承文藝研究』28, 96-101.

佐々木由美子 (2012). 「幼児は『そらいろのたね』をどのように読んでいるのか-物語の受容と子どもの育ちにおける物語の役割-」『東京未来大学研究紀要』5, 31-40.

秀真一郎 (2018). 「絵本の読み聞かせにおける一考察-感情の有無からくる影響-」『吉備国際大学研究紀要』28, 1-8.

Silverstein, S. 作, 本田錦一郎訳 (1976). 『おおきな木』篠崎書林.

曾和信一 (2017). 「絵本の読み聞かせについての一考察」『四條畷学園短期大学紀要』50, 1-8.

- 末永香, 中山静和 (2012). 「看護学生が持つ子どものイメージとそれらに関連する要因」『城西国際大学紀要 看護学部』21 (1), 28-39.
- 内田雅代, 古谷佳由理, 兼松百合子, 中村美保 (1993). 「小児看護実習における学生の子どもに対するイメージの変化について」『千葉大学看護学部紀要』15, 35-42.
- 上山和子 (1999). 「看護学生の子どもに対するイメージ変化と小児看護学の授業方法について」『新見公立短期大学紀要』20, 125-133.
- World Health Organization. (2008). “Children are not small adults”. <http://www.who.int/ceh/capacity/Children_are_not_little_adults.pdf> (2020年8月25日閲覧)
- 山田秀江 (2017). 「『絵本の読み聞かせ』に関する一考察—学生の読み聞かせ体験の実態調査より—」『四條畷学園短期大学紀要』50, 38-46.
- 山口拓夢 (2018). 「『エミール』の教育思想」『札幌大学女子短期大学部紀要』65, 95-116.

Educational Effect of Reading Illustrated Books to Nursing Students by Pediatric Nursing Instructor

Kaoru Shirai^{1,a}, Yuko Kodama^{2,b}, and Tomohiko Sato^{2,3,c}

(¹Seisa University, ²Graduate School of Education, Seisa University

³The Jikei University Hospital)

Abstract

[Background] Reading children's illustrated books to nursing students by a pediatric nursing instructor has been introduced into an "Introduction to Pediatric Nursing" class at 3-year nursing college X since fiscal year (FY) 2012. The practice aimed to help students understand children's characteristics, with adopting the notion that "Children are not little adults." [Purpose] This study explored educational effect of the instructor's reading practice on the students' understanding of children's characteristics within the scope of nursing. [Method] An anonymous survey questionnaire regarding the instructor's reading practice was conducted on a total of 120 students in FY 2016 (n=40 per grade). The data was analyzed quantitatively and qualitatively. [Results] Ninety-four students (78.3%) responded to the survey. Over 90% of participants had positive images of illustrated books and ninety-three (98.9%) recognized the difference in interpreting the content of books between children and adults. Qualitative analysis revealed that the participants' key components to understand the notion of "Children are not little adults" included "children's immaturity", "inexperience", "originality", "dignity", "adulthood" and "respect to child". Furthermore, when the third-grade students looked back on their encounters with children in the pediatric nursing practicum, they recognized "children's immaturity" and "originality" as important components to be acknowledged. [Conclusion] The data indicates that pediatric nursing instructor's reading children's illustrated books to nursing students at an "Introduction to pediatric nursing" class is an effective method to promote students' support in understanding of children's characteristics.

Keywords: Basic nursing education, "Introduction to pediatric nursing" class, Understanding of children's characteristics, Reading illustrated books, Class evaluation by students

Accepted on 14 October 2020. Correspondence: Tomohiko Sato, tomosatou-tky@umin.net

^a Visiting researcher at Seisa University

^b Professor at Graduate School of Education, Seisa University

^c Associate professor at The Jikei University Hospital, Specially-appointed professor at Graduate School of Education, Seisa University